はそのとき70歳を過ぎていて、小倉先生は43歳で、鉄樹に師事するかたちでの夫婦になられ、天寿を全うされたわけです。今回のパリの展覧会には、こういう方たちの作品も出品されました。

私の年齢の古希というと、普通の会社なら一丁上がりというところですが､院展においては、まだ中堅といったところです。なにしろ、102歳の片岡珠子先生も作品こそ出されていませんが、お元気ですし､90歳以上の人たちは4~5人､80歳以上はたくさんいます。

院展の同人は現在36名で､そのうちの32点をパリに持っていきました。あちらの皆さんは、東洋の美術に非常に関心があります。かつてパリ万博が開催されたとき、日本の陶器を展示するために、浮世絵を包装紙として使ったそうですが、それを開けたときに、みんな日本の版画に驚いた。それからジャポニスム的なものが爆発的に広まり、ゴッホにしろゴーギャンにしろ、日本の浮世絵を自分の作品にそっくり使っている。そういうことがありますので、今回77年ぶりの日本画の展覧会が行われたのは、自画自賛するわけじゃありませんが、非常に有意義だったんじゃないかと思います。

私はこの前の土曜日、京都の相国寺に伊藤若冲（いとうじゃくちゅう）展を見に行きました。若冲は、徳川幕府の最後のころに人気のある画家でしたが、それ以降はしばらく話題になりませんでした。若冲は相国寺の檀家で、花鳥や魚の絵を寺に寄進していました。それが、明治維新の廃仏毀釈で危うくなったので、寺は、30枚あった絵を全部、天皇家に買ってもらったのです。だから、相当に大きい若冲の絵が全部並ぶのは、120年間ぶりのことで、そのために会場は非常に込んで、２時間半、炎天下で並んで待つほどでした。若冲の画は精神的に云々というより、とてもカラフルで、デザイン的な感じがするのが特徴だと思います。これがヨーロッパなどに紹介されると、また違った意味での話題を呼び起こすのではないかと思って帰ってきました。

パリの展覧会場では、スウェーデンの女性が近づいてきて、流暢な日本語で私に質問してきました。いま日本画をやっているが、非常に細かいところが難しい、そういうものをどうやって描けばよいかというのです。私は、とにかく花一輪でも、愛情をもって一所懸命見つめながら、花と会話しながら描きなさい。それしか手はない。数多く描いている中で自然と覚えていくしかないと答えました。彼女は、難しいですねといっていましたが、それはどんな場合でも難しいと思います。私は、自分で描いていく中で、ただ美しく描くのでなく、自分の哲学をもちながら、いまというときに感謝しながら仕事をすることだと思っています。パリでの展覧会のタイトルは、“日本画「今」”です。日本の美術は今後どのように変革していくかわかりませんが、そういう中に身を置いて､がんばっていきたいと思っています。